

A B A 新聞

編集
株式会社
エイアンドビー
アシスト

東日本大震災から10年

今年はその東日本大震災から丸十年を迎えることとなります。ただ昨日の事のようにです。

県内の津波で壊滅的な被害を受けた地域も、かさ上げが進み住宅や商業施設などが建ち並ぶようになり

なりようやく活気が戻ってきましたが、いまだに課題は山積みです。

この震災では行方不明者も含めて2万人以上が犠牲になりました。一度とこうした多くの人が犠牲になるような災害を起してはなりません。



ません。残された者は大震災の教訓を生かし、次の災害における被害を最小化することが最大の任務です。そして震災の経験の後世に伝えていくことが、犠牲者に伝える道だと思えます。

新年明けましておめでとうございます。今年こそ新型コロナの感染拡大が終息し、平常な日々を過ごせますように、また皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。本年も宜しくお願い致します。

新年のご挨拶

当社は『伝えたい！明日への準備をすること』を・・・』を心に刻み、常にお客様の人生が豊かになることをひたすら追求する保険ソムリエのいるお店として、安心情報発信の基地地局の役割を担ってまいります。

(株)エイアンドビーアシスト
代表取締役 橋本 満

1月17日。

この日、熱海では「尾崎紅葉祭」が行われる。文豪・尾崎紅葉の代表的な未完の小説は『金色夜叉』である。この小説に有名な場面がある。映画にも芝居にもなってヒット歌もあるから、古い人なら知っているだろう。

貧乏学生の間貫一（はぎまかんいち）は鳴沢宮（しぎさわみや）とは許婚の仲であったが、宮は貫一を裏切り、金持ちの男と結婚することになる。貫一は月の照る夜、熱海の海岸で宮さんと会い、その話を聞き怒りに震える。そして、『一月の十七日。宮さん、善く覚えてお置き。

来年の今月今夜、再来年の今月今夜……僕の涙で必ずこの月を曇らして見せる』と叫び、許しを請う彼女を下駄で蹴って去る場面である。この台詞の「1月17日」が「尾崎紅葉祭」の日なのである。

この日の月は何だかんだだったろうか。小説は読売新聞に1897（明治30）年1月1日から始まり、熱海の海岸

岸シーンは2月18日の新聞に載った。1月17日は明治30年として間違いないだろう。調べてみるとその日は、1日早いがほぼ満月である。まだ旧暦だったかもしれないとそれも調べてみたら、旧暦の12月15日で、やはり満月の日であった。紅葉は、その日が満月であることを知っていた。明るい熱海の海岸を想像しながら、寛一にの



1月17日の月

台詞を語らせたのだ。

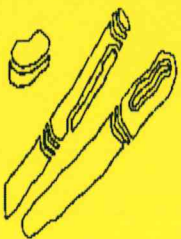
では、この日の原稿をいつ書いたのだろうか。17日より前とも考えられるが、新聞に載ったあとで「あの日は雨降りて熱海には月が出ていなかった」と言われては困る、と紅葉は考えたはずである。この日の月の出が午後3時半、もっとも高くなるのが午後11時ごろである。日

が暮れたときには月は昇り初めている。その夜、紅葉は東南の空に浮かぶ満月を窓から眺めながら、この稿を執筆した。と、私は思う。

1995（平成7）のこの日は、阪神淡路大震災の日でもある。

地震発生の日は満月であった。震災から1週間後、調査のため半月ほど神戸に入った。夕暮れ、街は真っ暗闇だった。見ると、ほのかに明るい西の空に六甲山がシルエツトで浮かび、空には宵の明星が光っていた。地震の1週間後の月の出は真夜中12時ごろで、翌日の昼には沈むから、その日、月は出ていなかったのだ。

(Y・N)



店頭でアンケートにお答え頂くと「オリジナルEドライブ」プレゼント中★

